

2022 年度 研究室活動記録

オープンラボ記録

本年度のオープンラボは、教育学研究科説明会のオンライン化により、資料配信を行った。研究科 HP に関連資料を掲載している。

<http://www.p.u-tokyo.ac.jp/entrance/graduate>

ワンデーセミナー記録

2019 年度の開催以来、新型コロナウイルスの影響で中止が続いていたが、本年度は 3 年ぶりの開催となり、図書館情報学研究室と社会教育学研究室の研究交流を目的として、両研究室の OB/OG による研究、教育等に関する発表が行われ、さらに座談会で教員、大学院生を交えた様々な内容の質疑応答が行われた。

<実施概要>

◆日時：2022 年 9 月 6 日（火）13:00-16:00

◆開催形式：オンライン

◆発表者：久井英輔，朱心茹

講義内容一覧

【生涯学習論基本研究Ⅰ】担当：教授・牧野篤

本授業は、社会教育学・生涯学習論を学び、研究するための、院生各自の基本的な視点・研究の枠組み・方法論を形成するための基礎的な訓練とその発展を、文献の講読と検討およびフィールド調査によって、集団的に進めるものである。今年度もコロナの影響でフィールド調査ができなかったが、文献講読と討議を中心にハイブリッドの形式で行われた。

今年度は引き続き「社会教育のとらえ返し」を大きなテーマとし、戦後の社会教育・生涯学習の理念や機能が、変わり続ける社会の中でどのように変容し、どう実践されてきて、そして今後どう実践していくべきなのかについて深く学び、社会教育・生涯学習の実践のあり方への理解を通して、教育・学習という営みと社会とのかかわりに対する理解が深まった。

授業では、牧野篤著『発達する自己の虚構：教育を可能とする概念をとらえ返し』を講読した。章ごとに受講者が文献の内容を整理した上、資料を参考しながら各自の論点および疑問点を発表する形式で議論を進めた。産業社会の価値である発達概念の省察、資本制社会の在り方、そして対自性と再帰性などのテーマをめぐって活発な議論が行われた。

【生涯学習論論文指導】担当：教授・牧野篤，教授・李正連，准教授・新藤浩伸

本ゼミは、研究室に所属する大学院生が各自の研究を報告し議論する場として開講されている。一昨年度から続いてオンラインで実施した。各回 1-2 名の院生による研究報告が行われた。いまだ直接顔を合わせる機会が少ない中で、院生と教員が一同に会する貴重な機会でもあった。例年と同じように本年度の報告内容も多岐に渡り、通信制高校の課題、オーストラリアの文化教育事業、若者支援団体関係者の学び、生涯学習の現場におけるインクルージョン、といったものを軸に、多様なテーマや課題が示された。院生同士の議論では、互いの研究手法や文章表現の見直しがなされた。

教員からは検討すべき文献の紹介や研究手法への具体的助言、思考枠組みへの省察の促しなど多様な指導がなされた。とりわけ、学校教育をはじめとした近代的な機構を顧みることによって教育、とくに社会教育のあり方が見えるはずだということが強調された。これらを受け、院生各自が自身の研究姿勢を見直すとともに新たな認識枠組みを手にする機会を得た。

【図書館情報学総合研究】担当：教授・影浦峯

通称「総合ゼミ」と呼ばれる本講義は、主に図書館情報学研究室所属大学院生が研究発表をする場です。基本的に隔週で開催され、毎回 2 名が研究進捗報告あるいは学会発表練習を行います。発表者は影浦峯教授、河村俊太郎准教授、客員准教授の池内淳氏及び他の院生から質問と助言を受け、参加者全員が研究方法と内容について相互理解を深めます。発表者のテーマは大学図書館の市民へのサービス、読書相談サービス、テキストのリーダビリティ、ネイティブネスと言語のスキル、専門用語自動抽出、正しく適切な言語表現を構成する技術、正しい言語使用、大学図書館のサブジェクト・ライブラリアン、展示解説、句読法の用法と判別、大正蔵所収『統一経音義』に出現する異体字、地方の公共図書館ネットワーク、ラーニングスペース、文章の正しさ、フェミニズム翻訳理論、「context」の定義と機械翻訳における「context」、産業翻訳を対象とした目標言語文書間の差異、公共劇場、と多岐にわたりました。また例年通り、最後のゼミで修論検討会が開催されました。

【図書館情報学論文指導】担当：教授・影浦峯，准教授・河村俊太郎，客員准教授・池内淳

図書館情報学論文指導：論文指導は各院生がそ

の担当の指導教員と個別に行った。各院生は研究の進捗を資料にまとめ、指導教員から内容及び研究の進め方に関する指導を得た。4名の院生が修士論文を執筆したほか、院生は進捗に応じて論文投稿を行った。

【図書館情報学研究方法論】担当：教授・影浦 峽

本講義の目的は、研究室のメンバーが研究を進める上でその道具立てとして必要となる方法論を身につけることである。本年は技術系、対人実証系、記述系の3つのグループに分かれ、それぞれのグループで研究内容に必要な方法論を学んだ。1つ目の技術系グループでは、主に自然言語処理技術を用いて研究を行うメンバーを対象に、近年の研究手法を理解するため、国際会議及び学術雑誌に採録された論文の購読を行った。2つ目の対人実証系グループは、対人実験やインタビューを研究手法として用いるメンバーで、佐藤郁哉著『質的データ分析：原理・方法・実践』を輪読形式で購読し、調査の方法論を学んだ。本グループには同研究室の河村俊太郎准教授も指導に加わった。記述系では、言語表現を観察しその様態を記述する研究を行うメンバーが集まり、M. Foucault 著 A. M. S. Smith 訳 *The Archaeology of Knowledge* の輪読を通じて、文書を言語表現どおりに読むとはいかなることか、言語について記述するとはどのような言語表現を構成することかを学んだ。

【生涯学習論特殊研究Ⅰ】担当：准教授・新藤 浩伸

本ゼミは成人教育・生涯学習研究の蓄積について学び、各人の研究の基盤とすることを目標としている。ピーター・ジャーヴィス著『成人教育・生涯学習ハンドブック—理論と実践』を講読し、各回2章ずつ、全14章を読み進めた。

講義の進め方としては、発表者がレジュメをもとに要約と論点を発表したのち、受講者それぞれが事前に作成したコメントシートを共有するかたちで議論が行われた。全て Zoom を用いてオンラインで行われた。

講読文献では、「学びとは何か」といった哲学的な内容から現場での実践まで、幅広い視点から成人教育・生涯学習が概観されている。Internet Archive 上の原文を時折参照しつつ討議し、内容への理解を深めた。また、講読文献は英国を主とした欧米の理論や実践に焦点を当てている。講義では、日本や中国など東アジアの理論と実践についても議論し、比較することができ

た。本講義を通じて、成人教育・生涯学習に関する研究の国際的な動向を包括的に学んだ。

【比較生涯学習論】担当：非常勤講師・堀本麻由子

本講義は、【Eduard C. Lindeman, 『成人教育の意味』 [*The meaning of adult education*, New Republic, inc., 1926] 堀薫夫訳, 学分社, 1996,】の文献購読を通じ、1920年代以降のアメリカ成人教育の成立過程、その後の理論的系譜を概観し、アメリカ成人教育・学習論の特性を、とりわけ職業教育、専門職養成の観点からの検討を主目的としたものである。授業形式は、各回の発表担当者が整理した書籍の該当部分の要約と議題テーマを活用した議論を中心としたものである。本書籍で記載されたことと、現代日本や受講生からの具体事例を比較しながら議論を行うことで、アメリカ成人教育・学習論の特性を理解するとともに、現代の日本でも共通した課題があることや、相違点を理解した。

また、上記の書籍購読以外にも、【Yoshie Tomozumi Nakamura and Mayuko Horimoto “A Conceptual Framework for Developing Women Social Entrepreneurs in Japan” *Advances in Developing Human Resources*, 2020】や【Yoshie Tomozumi Nakamura, Yuan Gu, Hecheng Jin, Deyang Yu, Jessica Hinshaw & Rehan Rehman (2022) “Introducing neuroscience methods: an exploratory study on the role of reflection in developing leadership from a HRD perspective,” *Human Resource Development International*, 2022】といった「企業におけるリーダーシップ」をテーマとした論文を購読し、2022年に刊行された論文については、オンライン形式で論文執筆者の中村先生にゲストとして参加いただき、他大学院生の方々との合同講義が行われた。

【生涯学習論特殊研究Ⅱ】担当：教授・李正連

本授業は、社会教育学・生涯学習論を学び、研究するための、院生各自の基本的な視点・研究の枠組み・方法論を形成するための基礎的な訓練とその発展を、文献の講読と検討を中心として進められた。今年度は、対面参加を基本としつつ、オンライン参加も可能とするハイブリッド形式で行われた。教育学部棟312号室の電子ホワイトボードと Zoom を活用することで、参加者たちが不便を感じることなく議論できるような環境となった。

授業の内容としては、日本社会教育学会編『生涯学習政策と社会教育』（1986）および

『生涯学習体系化と社会教育』（1992），東京・沖縄・東アジア社会教育研究会編「特集：東アジア社会教育・生涯学習 50 年」『東アジア社会教育研究』（第 27 号，2022）を扱い，80 年代以降の日本の生涯学習政策の変遷を東アジアの動向と一緒に考察することによって各国の特徴および日本の今後の課題について議論した。

今年度の授業では日中韓の院生がすべて参加していたため，それぞれの母国の事情について詳しく調べ，活発な議論を通じて各国の生涯学習政策の課題についてより明瞭に理解する機会となった。

【プログラム評価論】担当：非常勤講師・安田節之

教育機関や多様な組織，コミュニティで行われる対人援助・人材育成・組織開発・地域活性化などを目的とした多実践・介入活動をプログラムとして客観的に捉え，その結果や効果を評価し，活動の質向上につなげるための方法論を学んだ。今年度は集中講義として対面で開催し，講義と演習（グループワーク）を中心に行われた。

教科書『プログラム評価：対人・コミュニティ援助の質を高めるために（ワードマップ）』（安田節之著，2011 年）の内容をもとにした講義とディスカッションを通じ，プログラム評価の概要，評価の方法に関する基礎知識を学んだ。演習として，実際のプログラムを題材としたプログラム評価をグループワークで行った。グループ毎に，誰かが関わる実践活動に関して，プログラムの問題分析，ステークホルダー分析などを行い，ロジックモデルを作成してプログラムの可視化および評価クエスチョンの設定をし，最後にグループ発表を行った。

【情報媒体構造論】担当：教授・影浦峯

読むことに必要な「技術」とは何なのか。いかなる書物も「言語」という媒体を通さなければならず，それゆえ言語表現を前に私たちは実質上，言語学を単位に「読書」「翻訳」を考えているが，どこにでも明示的に意識されていない。本授業は，言語学を単位に言語の「理解」も「言語習得」も，「言語使用」の対象として扱わない。翻訳における「文」と「文書」の違いがあらわすように，言語における思考を外在化し可視化し，操作可能にする最低限の手続きとは何か，というレベルでの「言語使用」を議論の前提とする。以上のような視点から，本講義は竹山美宏 著『数学書の読みかた』の第 1

章から第 3 章を講読し，展開された。数学書とはどのようなものなのか，数学書ではどのような言語表現を使うのか，そしてこのような数学書を読むためにどのような「技術」——泳ぐ，運転する，微積分を計算するような外在化され，訓練によって身につけられる記号操作の技術が必要なのかをめぐり，受講生は担当教員が講読テキストをもとに取り上げた質問を通して実際にこのような「言語使用」の技術のあり方に触れることができた。

【図書館情報学理論研究】担当：准教授・河村俊太郎

本授業では，図書館情報学に関わる博士論文や卒業論文で作成した本の購読を通じて，文献の内容を理解するとともに，文献の読み方や，論文の書き方を学んだ。購読した本は，『図書館の倫理的価値』，『教科書の中の知識』，『公立図書館の無料原則と公貸権制度』，『中学校学校図書館における生徒の居方に関する検討』，『図書館評価の有効性』である。

具体的には，受講生が担当する本に対して，事前にレジュメを用意して発表を行い，発表した受講生自身がわからなかったことや他の受講生がわからなかったこと，文献の書き方や内容に対する意見を，議論を通して討論していった。

【図書館情報学特別講義】担当：客員准教授・池内淳

本講義では，「現代における図書館の諸問題」をテーマとして，教員による講義と受講生によるプレゼンテーションが行われた。授業形態はオンラインであった。講義では，図書館の機能，図書館による選書，図書館建築，図書館による利用者調査の方法等，図書館の諸側面をめぐり現代社会の動向が解説された。受講生はそれに関する知識とそれに対する批判的な視点を得るとともに，演習課題を通じてアンケート調査の作り方を学んだ。プレゼンテーションは，受講生各自が現代の図書館に関わる論点を担当回の授業で 1 つずつ提示し，それぞれについて受講生が全員でディスカッションを行うという形式で進められた。図書館学を専門としない他専攻，他研究科所属の受講生も多く，紹介されたテーマは，図書館電子化の是非から，児童書の選書の基準と主体，学校図書館の設置位置，特定利用者に対する利用制限の是非，図書館での居眠りや自習の是非まで多岐に亘った。受講生は，社会，教育制度において図書館が果たすべき役割とは何かという視点から各論点を議論した。

【デジタルドキュメント論】担当：非常勤講師・阿辺川武

本授業は、デジタルメディアで配信、流通、保存され、参照されることを前提として記録された情報をデジタルドキュメントと定義し、デジタルドキュメントをめぐる、コンピュータ処理の仕方、位置づけ、技術要素、電子書籍・電子出版における動向等を理解することを目標に、授業が展開された。授業は対面オンライン併用で実施され、毎回1つのトピックを扱い、前半は講義形式でトピックに関連する内容を学び、後半は各自手持ちのパソコンを用いてデータ処理の演習を行うという流れで進められた。授業を通して、PDF解析、テキストマイニング、書誌データの集計と可視化、クラスタリング、引用分析、Wikipediaからの情報抽出、オフィス文書の解析、紙の文書のデジタル化、自由記述文アンケートの分析などの多様なテーマについて知識を得ることができた。また、演習を通して、コマンドラインやPythonスクリプトを利用したコンピュータ処理の仕方を具体的に学び、実践することができた。

個人研究活動報告

(図書館情報学研究室 博士課程)

〔王一凡〕

引き続き希麟撰一切経音義の異体字分析のための切り出しシステムの作成と博士論文の執筆を行っています。博士論文は前半を占める近代以降の一切経音義研究を広汎にサーベイした部分の執筆を終わらせました。

研究発表として7月にDH2022 Tokyoにてポスター発表“Issues on Text Encoding of an East Asian Literature”を行ったほか、同会議の運営として予稿集の作成を行い、その関連で9月のTEI 2022にてオンラインポスター発表“Multilingualism and multiscriptism in TEI publishing: DH2022”を行いました。TEI 2022ではまたプログラム委員を務めました。7月に刊行された、石田ほか(編)『人文学のためのテキストデータ構築入門：TEI ガイドラインに準拠した取り組みにむけて』(文学通信)のうち1章を執筆しました。1月にシンポジウム「古辞書データ共有と拡張」にて共同で口頭発表「仏典文字の標準化におけるSATの取り組み」を行い、2月に下田正弘教授ご退任記念シンポジウム「デジタル仏教学の歩み 人文情報学教育の歩み」にて口頭発表「デジタル仏教学の国際標準化」を行いました。

その他、研究に関連して、漢字および仏典用字の標準化のために各種国際会議に定期的に参加するほか、国立国語研究所のチームと協力して標準化活動に参画しています。

〔大西賢太郎〕

今年度は、教育学研究科の若手研究者育成プロジェクトの助成を受け、本研究室の名倉さんとの共同研究「学習言語を用いて誰もが正しく読めること・書けること：高等教育への以降段階で求められる読解・説明とはいかなる行為か」に取り組んだ。筆者はこれのうち読解に関する研究を担当し、文章読解、言語理解の定義に関する先行研究中の議論の動向をまとめるとともに、英語習熟度テストIELTSの題材文の分析、設問への解答に使われる言語スキルの分類を行った。また今年度、同プロジェクトへの参加、総合ゼミ等でこれまでも増して多くの院生の研究について話を聞くことができたのは非常に良い経験となった。

〔渡邊晃一朗〕

主に2つのことに取り組んだ。1つ目が博士論文に関するものである。句読点・字体・大文字の役割を研究テーマとして、前年度の成果である句読点・字体・大文字の役割の類型の整理とその識別を可能にする記述を再度整理し直し、その上で句読点・字体・大文字の役割それぞれの事例の記述的分析を行っている。この成果は2つの雑誌論文として公表した上で、この内容に基づき来年度中での博士論文の提出を予定している。これについては以前と同様、理化学研究所においても関根聡氏にご指導を頂いている。2つ目には株式会社 pluszero との共同研究として引き続き「言い換えに関する研究」において研究業務に取り組んでいる。この共同研究における成果も前年度と同様に学会発表などで公表することを予定している。

〔森山光良〕

日本の公共図書館の総合目録事業は機能してきたか、という問いを立て研究を進めている。本年度は、地方の基礎的自治体管下の図書館によって広域で形成される連携機能についての定量分析と、そこで評価された連携機能を都道府県域で活用する可能性についての制度分析に取り組んだ。この研究に関する社会貢献活動として、北海道胆振図書館協議会からの市民公開講座での講師依頼を受けて、12月1日に登別市立図書館にて、「公共図書館ネットワークの発展

「西いぶり広域図書館の位置付け」という演題で講師を務め、研究成果を市民と共有した。また、共著で『図書館情報技術論』（ミネルヴァ書房）を執筆し、5月に刊行された。今後の研究では、ここまで蓄積してきた基礎的自治体管下の図書館の実績データを、都道府県立図書館の市町村支援に関する実績データと結びつけ、研究をさらに発展させたい。

〔福永智子〕

今年度は、公共図書館の読書相談サービスをテーマとして、博士論文の構想をより明確にすることに取り組んだ。博士論文は二つの部分から構成される。前半は読書相談サービスが日本の公共図書館でどのように位置付けられてきたのかを検討する、図書館制度としての読書相談サービスの研究である。レファレンスサービス、読書案内、読書指導などとの関係を歴史的に追う作業を進め、その成果を、2022年度日本図書館情報学会春季研究集会において「雑誌『読書相談』における「読書相談」という概念について」というタイトルで発表した。

後半は、人々が実際にどのような手がかりから文学作品を探しているのかを明らかにするための読書相談質問の研究である。読書相談質問とレファレンス質問との違いを軸に、実際の読書相談質問を分析する研究を進め、成果を論文として年度内に学術雑誌に投稿することを目標にしている。

〔曾加〕

今年度より博士課程に入学し、修士論文に引き続きサブジェクト・ライブラリアンの利用者ニーズに対して研究を行った。6月に日本図書館情報学会春季研究集会にて修士論文に基づいて、「大学内の他のサービスとの比較から見たサブジェクト・ライブラリアンへの大学院生が持つニーズについてー東京大学大学院教育学研究科を事例にしてー」というテーマで発表を行った。その他、サブジェクト・ライブラリアンを対象にした日本語・英語で作成した研究を中心にレビュー論文の執筆を行った。

〔名倉早都季〕

今年度4月より博士課程に進学し、説明や論理的表現等、他者と客観的に共有可能であり正しく妥当な言語表現を構成するためのスキルについて研究を行った。言語教育の中で、そのようなスキルがどのような位置付けにあり、具体的には何ができることが求められてきたかを分

析した。大西賢太郎氏とのグループ研究が教育学研究科附属学校教育高度化・効果検証センターの若手研究者育成プロジェクトに採択され、助成を受けた。

年度前半は、説明の言語表現として国語科で求められてきた語に関するデータ分析を行った。分析の結果は、2022年9月の計量国語学会第66回で口頭発表し、同学会学会誌へ論文として投稿した。年度後半は、言語表現に関する追加の分析と、その知見をまとめた論文の執筆を進めている。また、レビュー論文の執筆に向けて、英語圏のアカデミック・ライティングや国語科の書く教育に関する文献の整理、読み込みを行った。

〔姚依辰〕

本年度より博士課程に進学した。7月には日本読書学会の学会発表で、11月にはSNU-UTokyo-NCCU シンポジウムで修士研究の成果を発表・整理しながら、本年度はこれからの研究関心及び研究の課題設定に向けて活動を行なった。読むことはどのようなことなのか。「読んで理解する」とはどんなことを指すのか。

読むことの対象は「文」であり「書かれた言葉」であれば、文を読むことは言語を使う行動としか見なされない。このように「読む」についての研究は言語学の範囲に収まり、そして読む能力はその範囲での「言語能力」(language competence)として扱われてきて、「母語話者」が母語の言語使用における優位性が確立された。果たしてこのような優位性があるのは妥当なのかを議論することは修士研究の基本内容だった。このような視点から展開し、博士研究は「言語使用」に必要なのはどのような技術なのかを模索する。出発点としては、現在の読書研究においてどのような技術が必要とされているか、読書という行為はどのように・どのような前提に基づいて分析されているかを記述する。

〔図書館情報学研究室 修士課程〕

〔栢場美帆〕

今年度は、『生涯学習基盤経営研究』へ投稿する研究ノートの執筆と、修士論文「科学系博物館の展示解説の計量的分析: 国立科学博物館「地球環境の変動と生物の進化 恐竜の謎を探る」の展示と『小学館の図鑑NEO [新版] 恐竜』の解説文を比較して」の執筆の2点を主に行なった。研究ノートとして投稿したものは、昨年度から取り組んでいた、修士論文執筆に向けた先行研究の検討の結果をまとめたものであり、本『生

涯学習基盤経営研究』に掲載予定である。修士論文の執筆にあたっては、国立科学博物館の展示で使用されている展示解説を実際に分析して結果を記述していくだけではなく、文章の計量的な分析手法とは何であり、どのようなものがあるのか、それを通して何を明らかにしようとするのか、そもそも文章を計量的に分析したいとなったときに何をしなければならないかなど、分析の一手手前で理解しておく必要があることについて勉強した。

〔坂本陵司〕

今年度取り組んだことは2点ある。1点目は修士論文である。テキストの「複雑さ」「読みやすさ」とは何か、に関する修士論文を執筆した。論文では、第一に、読解力を測る指標として用いられる readability 指標が、何を対象として、何を測っているのか、第二に、機械の言語理解の評価として機械翻訳の精度を readability 指標スコアとの関係から観察するとき、どのような特徴が見出せるのか、という2つの課題の元、readability 指標の整理と機械翻訳に関わる実証分析を行った。

2点目は、言語表現に関する勉強である。昨年に引き続き、図書館情報学研究室影浦峽教授のゼミを中心として言語表現をめぐる勉強を重ねた。特に、図書館情報学研究方法及び情報媒体構造論を通じて、言語表現を一つ一つ追っていく重要さを学んだ。影浦峽教授から多くのことを学ばせていただき、ここに深く感謝申し上げる。

〔長谷川英明〕

本年度は主に修士論文の原稿執筆に努めた。具体的には、修士一年次から構想してきた「大学図書館の学外開放」についての研究概要（問題背景と実際に取り組む研究テーマ）の明確化と取り扱う文献の整理を行い、研究方法を決定した。そして、指導教官の先生のご指導の下、実際に研究と論文執筆を行なった。この過程において特に意識した事は「先生のご指摘をお聞きする事」と「先生のご指摘を意識した研究・論文執筆を行う事」の往復のスケジュールを効率良く行う事であった。また、執筆した論文は先生に添付資料としてお送りして添削して頂き、研究の進め方やメールでのやりとりでは意思疎通が難しい事についてはミーティングでご相談させて頂くなど、先生からご指導して頂く方法も意識した。修士二年後期はデータの集

計・分析作業にも注力し、修士論文提出直前期は修士論文としての体裁を整えた。なお、総合ゼミでの諸先生の方々や院生の方々のご指摘を研究活動の参考にさせて頂いた事も報告すべき事項である。

〔胡珮〕

本年度は修士執筆に取り組んだ。利用者ニーズの変遷という視点から研究を進め、利用者ニーズの変遷が大学図書館の学習空間へ与えた影響を検討した。具体的には、大学図書館の学習空間を対象に1970年代から2019年までの関連研究をレビューした上で、東京大学総合図書館別館ライブラリープラザという研究対象に絞り、東京大学総合図書館における別館ライブラリープラザという学習空間の位置づけを考察した。1970年代～1980年代、1990年代、2000年代、2010年代という4つの時代に分け、それぞれについて図書館の教育学的側面、図書館情報学、建築学から大学図書館の学習空間に関する研究状況を整理した。利用者ニーズの変遷を整理し、東京大学総合図書館の学習空間に対して利用者ニーズの変化していない部分と変化している部分を示した。その上で、利用者側にとってどの要素を重視しているかを明らかにした。さらに、利用者ニーズを考慮する際に、大学図書館管理者の意向が図書館利用者の要求をどのように組み取っているかを分析した。

〔黄心語〕

昨年度に引き続き、フェミニズム翻訳の発展経路に着目し、その視点から見る翻訳と翻訳者の位置づけについて研究を進めています。本年度は、英作家バージニアウルフ（Virginia Woolf）が書いたノンフィクション①と二冊の訳本②と③を対象として選び出し、テキスト分析を行っています。具体的には、原文における「女らしさ」に関する描写に注目し、異なる翻訳手法を比較しながら、両者の共通点や違いを分析することを通じ、それぞれがもたらす意味伝達への影響を明らかにすることを目指しています。

①Woolf, Virginia, *A Room of One's Own*, England, Hogarth Press, 1929.

②Woolf, Virginia 『自分ひとりの部屋』[*A Room of One's Own*, England, Hogarth Press, 1929,] 片山亜紀訳, 平凡社, 2015.

③Woolf, Virginia 『自分だけの部屋』[*A Room of One's Own*, England, Hogarth Press, 1929,] 川本静子訳, みすず書房, 1988.

〔本田友乃〕

今年度より修士課程に進学しました。昨年度の卒業論文から継続して、原文を同じくする複数の翻訳間の差異に関する研究を進めています。前期は主に、これまでの研究のとりまとめと今後の研究の方向性の確認に時間を割きました。なお、昨年度の研究については、山本真佑花氏、影浦峽氏と共著で『通訳翻訳研究への招待』に論文として投稿し、採択されました。

後期は、卒業論文から研究対象を拡大し、翻訳間の差異を記述するためのスキームをさらに洗練させる作業を行いました。研究は、9月より開始した情報通信研究機構でのインターンシップと接続させ、指導担当の藤田篤氏にも研究にご尽力いただきました。インターンの受け入れが終わる今年度中に、再構築したスキームの一貫性と網羅性に関する検証を完了させることを目標としています。

また、年間を通して研究ゼミに参加し、研究を進める上での具体的な手続きを学びつつ、レビュー論文の執筆、投稿に向けた準備を進めました。

〔濱祐輝〕

2022年4月に、東京大学教育学部から学際情報学府文化・人間情報学コース修士課程に進学した。卒業論文のテーマである「文法誤り訂正」に関する研究をさらに進めるべく、リサーチクエスションの検討や関連論文の調査に取り組んだ。現時点の修士論文の目標は、文法誤り訂正において「わかったもの」とされている修正後の文章の判断基準やその特徴を明らかにすることである。また、研究室内で行われている方法論ゼミ技術系や研究ゼミなどに出席し、技術的な基礎知識や研究において必要なスキルを学んだ。本年度は体調不良が続き十分に研究に打ち込むことができない状況であったが、徐々に体調は回復している。2023年度は修士論文を執筆することを目標に、本年度よりもしっかりと腰を据えて研究活動に取り組みたいと考えている。

〔方超鳴〕

今年度から修士課程に進学した。学部の方から変更したため、これまでの結果を一つの論文にまとめて投稿し、現時点は査読中である。この半年間は多言語における専門用語の自動抽出を方向として研究活動を進めた。先行研究をレビューしながら該当領域の知識を体系的に学習し、研究を進むのに必要なスキルも理解して身につけつつある。そもそもの疑問である

「専門用語とはなにか」から始め、モノリンガルとマルチリンガル環境における専門用語の特徴・出現パターンなどをレビューする上で、中国語・英語・日本語を対象とした専門用語を自動抽出できる手法およびその精度の向上を目標としている。8月以来はプログラミング学習もかねて既存手法の再現を行い、多言語を対象とした専門用語自動抽出の先行研究を理解するための枠組みを作り上げたが、対象言語の特化・抽出手法の調整は未だに課題として残っている。

（図書館情報学研究室 研究生）

〔王東玥〕

本年度は昨年度から継続して「context」の定義に関する研究を進め、会誌「自然言語処理」に投稿する予定の論文「A Review of Concepts of Context: Towards a Better Understanding of Context in Machine Translation」を執筆した。内容としては、「context」の定義に関する文献、翻訳研究に関する文献、文脈情報を考慮したニューラル機械翻訳に関する文献により、一般的な「context」、人間翻訳における「context」、機械翻訳における「context」を整理し、分類体系のデザインを推敲した。MTに関する研究が急速に発展していることを考慮して、2022年の最新論文を20本追加した。さらに、機械翻訳と人間翻訳が訳す際に考慮するコンテキスト情報の共通点と相違点を整理し、機械翻訳が流暢性と自然性において人間翻訳に負ける理由を分析した。次の段階では、機械翻訳におけるこのような弱点の解決策を模索し、訳文の流暢性と自然性を高める方法を提案する予定である。

（社会教育学・生涯学習論研究室 博士課程）

〔松尾有美〕

韓国に移住してから約1年半が経ち、こちらでの生活にもだいぶ慣れてきた。2022年度上半期は引き続きコロナウイルスの影響で防疫が強化されており、なかなか動くことができずにいたが、下半期になると規制がだいぶ緩和され始め、博論執筆のためのインタビューの事前調査や、大田（テジョン）市の社会的企業の実践事例の定例勉強会に月1回参加するなど、望む活動が以前よりはできるようになった。また以前から関わっていた「日韓学術交流研究大会」

（日本社会教育学会・韓国平生教育学会の共催）が、コロナ禍になって初めて対面・オンラインという形で開催されるにあたり、日本側韓国在住スタッフとして通訳や渉外に関わり、様々なハプニングがあったものの2日間の日程をなん

とか無事に終えることができた。

その他の研究活動として、日本の社会教育・生涯学習の観点からの世界市民教育フォーラムへ初めてパネルとして参加させていただいたり、先にも上げた大田の実践現場でも、日本の事例や研究、基本的な情報を尋ねられ、それについて私がどう思っているのかを語ったりすることが今年度は多かった。

一方で博士論文については、従来までの実践中心の課題意識から、共同育児の歴史研究へと方向転換をすることを決め、秋以降で資料を収集し、現在その部分をまとめようとしているところである。

〔林忠賢〕

昨年度に引き続き、明治期から戦前にわたって美術の鑑賞教育がいかに語られるかについて研究を進めた。その背景に官製造語として出現した美術に関する議論が経済的、政治的な要請によって活発になり、また、美術の制度化（視覚芸術の純化）のプロセスにおいて文明開化、啓蒙的な意味合いで国家によって奨励されたこと、そして美術に関する議論が、近代国民国家のための強力なイデオロギー装置であった学校教育まで広がっていくことにつながったことが文献調査を通して明確になった。このように、「目の教育」について学校教育の枠を超えて社会的な側面から捉えようとする考察をおこなった。

また、東アジア社会教育研究年報「台湾の生涯学習・この一年」や月刊社会教育 7 月号「酒工場から文化拠点への転身—台湾台北・華山文化創意園區—」を執筆した。なお、2022 年 11 月まで特任研究員として「大学における芸術教育プログラムおよびその効果検証方法の構築に向けた基礎的研究」に参加した。

〔金亨善〕

昨年度に引き続き、日本の PTA の歴史研究を通して見た学校と地域の関係及び住民自治の論点について個人研究を進めている。九州軍政部の取り組みを中心とした戦後初期の PTA 構想における研究助成をもらい（東京大学学校教育高度化・効果検証センター若手研究者育成プロジェクト）、その研究成果をセンター発行のワーキング・ペーパーに載せている。そして日本の地域・学校連携における特徴および課題について世界比較教育学会会議 (WCCES) シンポジウムで発表した（2022 年 11 月）。さらに、占領期当時の各学校の具体的な様子に関する考察

のために福岡を中心とする関係機関との連絡・相談をしながら資料収集をしている。

その他、今年度から立正大学及び日本女子大学で非常勤講師として勤めながら学部生と生涯学習関連また韓国に関する様々なテーマについて話し合っている。また、東京都世田谷区の「岡さんのいえ TOMO」の運営委員会や TOAFAEC（東アジア社会教育研究会）の韓国フォーラム等にも継続して参加している。

〔鈴木繁聡〕

引き続き、「学校と学習塾の関係」をテーマに質的研究を行っている。今年度は 5 月に共著である『社会教育新論』がミネルヴァ書房から出版され、私は第 1 部「「学校」をかんがえる」の中の第 2 章「学校の「公共性」を問い返す：民間教育事業者との連携の意味」を執筆した。また、ようやくフィールドに足を運べるようになり、学校と学習塾の両方で教えている教師へのインタビューや、学校と学習塾の連携が行われている自治体での調査を行うことができた。2022 年 8 月に行われた日本教育学会第 81 回大会や、9 月に行われた日本教師教育学会第 32 回研究大会で発表を行い、フロアの質問からたくさんのご示唆をいただいた。これまでの調査で得たデータをもとに博士論文を執筆していきたい。加えて、来年度は休学をして職務にも就く予定であるので、仕事と研究の両立に励みたい。

〔楊映雪〕

昨年度に引き続き、研究関心である中国変動社会における社区教育のあり方について研究を進めています。ただし、コロナ禍で海外渡航や行動が制限された状況の中、成果のとりまとめに不可欠なフィールド調査が実施困難な局面を迎えた 3 年目となったため、そしてやむを得ず対面での交流機会も減っていた研究環境の中に非常に挫折を感じました。しかしながら、指導教官との面談や院生同士の助言・励まし合いがあり、その壁を乗り越えようと信じており、研究計画を見直しつつ、基本的な文献調査から地道に研究を進めています。その成果として、「The Characteristics and Changes of Community Education in China: A Case Study of Residents' Participatory Community Education Activities in Shanghai」というテーマで 4 月の比較国際教育学会（CIES 66th Annual Conference）で口頭発表を行いました。その他、WINGS-GLAFS 国際卓越大学院プログラム生として、引き続きフレイル予防に関する

共同研究に参加し、オンライン型フレイルチェック開発研究の成果を国際学術雑誌に投稿することを目標に共同執筆を行いました。

〔田中小百合〕

従来からの研究関心であるひきこもり状態にある若者の支援に関わる支援者の実践と学びについては、実践と文献研究の両輪にて継続して追いつけている。しかし、研究を深めるために10年以上継続している若者支援の実践団体での活動を通して、新型コロナウイルスの影響やメタバースなどの新技術活用による社会参加のあり方の拡大が、若者支援現場に少なくない影響を与えていることに直面するに至った。

そのため、今年度は研究テーマの捉えなおしおよび刷新を行った。その結果、若者支援に関わる支援者の意識に起きている変化、および、従来では支援する側と支援される側に線引きされてきた関係性にどのような変化が起きているのかについて焦点を当て、若者支援に関わる支援者にもたらされている学びについて解明することを視座に研究を進めることにした。新たな視座での研究活動の発表は来期を予定している。

〔豊田明子〕

本年度も引き続き、植民地台湾における農業補習学校に関する資料収集をした。とくに今年度は文献検討だけでなく、畑で仲間と農作業をしたり、肥料や農薬と作物の収量の関係を学んだりすることで、「農民の生活」への洞察が少し深まったように思う。

本務校では「こども学部」に所属し、地域の子育て世帯や保育者・子育て支援者向けの講習会講師を務めることも多く、生活に根差す学びの重要性和難しさを実感している。多文化保育をテーマとする共同研究では、現場の保育者や当事者の声を聴き、保育者養成校のできることを探った。ここでの学びも博士論文の執筆に活かしたい。

学会活動としては、4月にアジア教育学会第33回研究例会の開催担当を務め、10月の第17回大会で「植民地台湾における農業補習教育—雑誌『台湾教育』からみる農業補習学校の卒業生指導」と題する口頭発表をした。ここで得た助言をもとに、現在、学会紀要に投稿する原稿を書いている。

〔鷺尾和彦〕

昨年度に引き続き、オーストリアの地方自治体において、1970年代後半以降、半世紀近くを

かけて展開されてきた「文化教育」(Kulturelle Bildung)の実践とその理念に関して研究を進めている。本年度の研究活動においては、同時代における欧州各国の「文化教育」の実践を比較考察すること、また合わせて、日本の高度経済成長期以降の社会教育政策について考察を深めることで、研究対象とする都市における実践を支えてきたその理念を浮かび上がらせるという方法も取り入れてみた。依然としてコロナ禍が続く中、海外滞在研究の機会は見合わせているものの、オンラインを通じて現地への取材を試みるなど、可能な限りのアプローチも行なっている。

また本研究から派生して、現在の日本の地方自治体における文化教育の実践についても取材する機会を得て、結果的には単著の出版が実現した。こうした経験も踏まえ、引き続き研究活動に臨みたい。

(社会教育学・生涯学習論研究室 修士課程)

〔猪瀬泰美〕

不登校の児童・生徒数が毎年最高を更新し続けている現在、遠隔教育という独自の形態かつ教育のセーフティネットとも呼ばれている通信制高校がどのようなオルタナティブたりうるかを考察するため、修論テーマを「通信制高校に対する教育ニーズの変遷と後期中等教育の課題」とした。戦後の教育改革で発足した通信制には、時代ごとに後期中等教育が抱える課題が反映される。1960年代の高度経済成長には急増する勤労青少年、単線型かつ普通科偏重によって高校が序列化し受験競争が激化する中で現れた不適応生徒、90年代の構造改革以降コロナ禍の現在まで受け持ってきた不登校生徒の大口の受け皿など、時代の教育ニーズを拾い上げてきた。通信制高校の変遷をベースに、定時制・通信制高校生による生活体験記録集『誇りある青春』に掲載された通信制生徒による手記を照らし合わせ、託されてきた課題を生徒の視点から検討し、今後の在り方について考察した。

〔楊博蓉〕

本年度は、新型コロナウイルスの感染拡大によって、海外での調査が展開できなかったため、昨年度のテーマを変え、「日本で就職した中国人元留学生の転職に関する一考察—転職の要因とプロセスに着目して—」を今年度のテーマとして修士論文を執筆した。

修士論文では、日本政府が留学生30万人計画を実施する中で、優秀な外国人材を積極的に誘

致しているにも関わらず、外国人留学生の定着率が低いことを問題意識の出発点としていた。そこで、転職というあり方に注目し、中国人元留学生が職場でどのような葛藤に遭遇し転職に至るのかについて、転職の要因とプロセスを検討した。文献検討を踏まえ、質的研究手法を用いてインタビューを行なった。調査を通じて、中国人元留学生の転職要因とプロセスを明確にし、留学生を定着するためには、日本企業が顧客や社会にとって意味のあることだと思えるような仕事の作り方、成長意欲が高い外国人に挑戦できる仕事の機会を提供することなどの工夫、社内の異文化教育の必要性などの示唆を得ることができた。

〔横山詢〕

昨年度から引き続き埼玉県大宮の盆栽村を主な研究対象としていたが、感染症拡大の影響により盆栽教室をフィールドとした参与観察が難しくなった。そのため、明治・大正期周辺の盆栽界の動向にかんする歴史研究へと研究方針を変更した。雑誌『盆栽』内の記述を主に参照しながら、当時の盆栽界の動きが社会教育の文脈においていかに位置付けられうるのかを検討している。また、盆栽村開設のきっかけに関東大震災があることに注目し、厄災からはじまる教育思想についての文献調査も進めた。冬学期以降休学をしているため、一年後の修士論文提出に向けて研究を続けていく。休学期間に入ってから、前述の研究活動は進めつつ同時に社会教育実践の現場にも入ることができ、市民の自己教育活動が生成する場に直接かかわるという貴重な体験をしている。

〔鈴木さやか〕

今年度 4 月に修士課程に入学し、修士論文の構想を始めた。修士論文では、卒業論文に引き続き「育てて食べる暮らし（農的暮らし）における学び」をテーマとし、対象を子どもから若者へ変えて、農的暮らしの中での経験が、現代の若者の主体性の形成に寄与するという仮説を検証したい。その準備として、研究科内外の講義を広く受講すること、農村の若者の実態や歴史に関する書籍を読むことに取り組んだ。しかし、この研究が何のために行われるのか、この研究をなぜしなければならないかを明らかにするため、調査フィールドである「渥美どろんこ村」での参与観察に時間をかけるべく、10 月より 1 年間休学することにした。

〔染葉ことの〕

本年度は学部の政治学から教育学へ専攻を変え、修士課程に進学した。教育学の基礎的な知識を身につけるため、文献を広く読み、他コースの講義も積極的に受講した。

修士論文のテーマとして、成人のバレエ教育、いわゆる「大人バレエ」について、成人教育・生涯学習の観点から研究を進めている。近年、「大人リーナ」と呼ばれる成人のバレエ学習者が増えているにもかかわらず、成人に焦点を当てたバレエ教育の先行研究はほとんど存在しない。そこで、余暇・レクリエーションや音楽教育など、より広い範囲で先行研究レビューを行っている。また、自分自身も「大人リーナ」としてバレエを学び続け、成人のバレエ教育現場に身を置いている。

さらに、日本社会教育学会、文化経済学会（日本）、舞踊学会の研究大会に参加し、各学会での研究の最新の動向を知ることができた。最近では海外の研究の動向を追うとともに研究への示唆を得るため、**Adult Education** や **Dance Education** に関するジャーナルを読み進めている。

〔岡田卓朗〕

本年度は、研究関心である「現代日本のキャリア観・教育の課題」の論文作成に向けて、資料調査による研究論点の明確化を試みた。具体的には、日本行政によるキャリア施策の整理を、下記 3 つの観点から行った。1 つ目は、日本のキャリア教育・施策に対して各省庁が出している資料を検討し、「働く」という定義のズレを確認しつつ、外国、特にアメリカのキャリア教育における「働く」の定義を書籍・論文などの文献で確認した。2 つ目は、個人と社会に在り様、特に責任の定義について確認し、自己責任という概念や、個人と社会を二項対立で切り分ける在り方への批判論点の明確化や整理を試みた。3 つ目は、実際に日本企業の人材育成分野に業務として携わる中で、企業が「キャリア」についてどう捉え、何を企業内施策として設計しようとしている、もしくは実施しているのかを確認した。

（社会教育学・生涯学習論研究室 研究生）

〔崔慧妍〕

本年度より外国人研究生として入学し、修士課程進学に向けて試験対策をたて、生涯学習基盤経営コースの授業およびゼミに参加し、生涯学習・社会教育学に対する理解を深めようとし

た。試験対策としては①生涯学習・社会教育学関連の専門知識の学習，②過去問対策，③論理的文章の書き方，④院試の英語対策などを行ってきた。そのほかにはまた，研究計画書をアップグレードし，研究目的をより明確にするため，エスニシティや朝鮮族教育史などに関する文献レビューを進めている。